HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭言
Author(s)	宮﨑, 隆志
Citation	子ども発達臨床研究, 8
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61356
Type	other
File Information	2_Kantogen.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

巻頭言

本センターはその名称が示す通り、子どもに焦点を当てた研究センターである。しかし、言うまでもなく「子ども」という概念は種々の社会的なカテゴリーと様々な対をなしている。大人・親・家族・発達・保育・養護・教育・学校…と限りなく続く対の連鎖は、人が育つ社会に不可欠な諸要素を照射していると言ってよいであろう。本センターの研究活動は、このような射程をもって進められている。

「子ども発達支援研究部門」では、以上のような諸領域に関わる「発達支援学」の構築をめざして活動を展開している。2015 年度は「異年齢期カップリング」をキーワードとしたプロジェクト研究を開始し、札幌市南区において多世代交流実践を展開している「むくどりホーム・ふれあいの会」に即した事例検討を進めている。この研究は、異学年協働形式の授業の可能性の探求や、現在の年齢別学年集団に起因する自尊心低下メカニズムの探求とも関わって、教育実践の新たな組織化の見通しを提起する可能性を秘めている。その成果は大学院総合講義において、院生との討議を経ながらまとめられつつある。

また、支援実践者の共通の関心事になっている家族支援の課題についても、学童保育実践との関連で分析が進められている。

「子ども臨床研究部門」では、発達障害の臨床技術に関するセミナーが継続的に開催されており、研究成果の社会的還元が進展している。また、ディスレクシア支援室（昨年までの「ディスレクシア外来」を改称）では 2 月末現在で延べ 69 名の相談に対応しており、社会的にも貴重な相談室として機能している。さらに、相談業務に留まらず当事者のグループ活動も継続的に展開され、理科教育に関わる学習支援研究も教育方法学分野の大野教授との連携の下に進められている。

「教職高度化研究部門」は教職高度化のための課題と方法の解明を使命としているが、教職課程履修学生調査や教職大学院の実態調査の結果に基づき、貴重なデータを集積しつつ分析を進めている。その成果の一端は「教職高度化フォーラム」として発表された。また、これらの実証的分析の知見に基づき、教職に関連する大学院共通科目を開講し、実践的な知見の彫琢にも既に取り組んでいる。

このように本センターは、①子どもとその発達に関わるあらゆる問題を視野に収める総合性、②実践者との応答に基づく課題設定と協働的な理論構築という理論と実践の統一性、③研究成果に基づく実践を独自に組織することにみられる実践的創造性を特色としている。また 3 部門の研究内容が有機的に関連することによって、従来にないような教育システムを構想し提言する可能性を持っていると言えよう。

このような研究センターとしての独自性をもとに、次年度は国際的な成果発信と交流を促進することが望まれる。

（センター長　宮﨑隆志）